

このニュースを地域民報への転載や各支部への配布など、積極的に活用してください。

さっぽろ  
**市議団ニュース**

＜第1回定例会＞

2020年3月23日

No. 218

日本共産党札幌市議団 事務局

tel 211-3221/fax 218-5124

## 2歳児衰弱死事件で検証委員会報告が出される

村上ひとし議員が質問

日本共産党の村上ひとし議員は19日、文教委員会で「令和元年6月死亡事例に係る検証報告」について質問しました。昨年6月に2歳児が衰弱死した事件で、有識者による検証委員会が秋元市長に「報告書」を提出。その報告が文教委員会で行われました。

「全市的な課題」、支援が必要な方の立場にたってこそ

村上議員は、冒頭、「非常に細かい分析と課題を明確にして提言されているが、問題はこれをどう生かすかだ」と強調。「報告」では、組織的マネジメントの問題が厳しく指摘され、「本事例では…保健師の上司にあたる部長、課長、係長は、最終段階に至るまで本事案の存在を知らなかつた」「このことは…他の事案全般についても同様のことが起こり得ることを示している」と記述されているとのべ、問題は、「全市的な課題」ということであり、支援が必要な方の立場にたって仕事をしようとすれば、担当職員だけでなく、職場全体でどう迫っていくのかということになるとのべました。

この点で、村上議員は、秋元市長が職員に向けたメッセージで、「全職員が他人事ではなく、自分のこととして『報告書』の最後の言葉を重く受け止めなければならない」とのべているが、問題は、職員が「動こう」という職場になっているかだとして、「どうしたら、市長の指示に応えることができるようになるのか」とただしました。

山根子ども未来局長は、「市長からは複数の部局が折り重なって仕事をする共同の視点が重要」であり、「支援を受ける方々の立場になって問題を理解する観点が大切」との話があったとのべ、「報告書を全職員にしっかりと熟読し」「自分の仕事に置き換えて、どう対応すべきかを考えてもう取り組みをすすめていきたい」「全庁横断的な組織を立ち上げて、実行に移されているのかどうかという検証する取り組みをスタートさせる」とのべました。

組織としての構造的な問題、検証をどう生かすのか

村上議員は、「10年間に4度もの検証報告という異常な事態」とのべ、「職員個人の力量では越えがたい組織としての構造的な問題があると感じているがどうか」「どのように検証報告を学び、生かしていくのか」と質問。山根局長は、「検証委員会の提言でも、個人ではなく、組織の構造的な問題と指摘を受けている」「共同の視点、あるいは支援が必要な方々の立場になって考えるという職員の意識を変えていく取り組み」を「どう根付かせるのかということ」とのべ、また、「報告書の内容の職員への浸透については、例えば、新規採用職員研修のテキストにこの報告書を用いる」ことなどをのべました。

村上議員は、専門的力量を持つ職員の養成が重要だが、「例えば、北海道子どもの虐待防止協会が北海道社会福祉協議会と共催して毎年フォーラムを開き、全道から300人くらいが参加しているが、札幌児童相談所や児童福祉施設の職員の参加は極めて少ないと聞く」とのべ、「関連団体との係わりを深めれば深めるほど仕事に対する誇りも湧き、自信を持つことにもなる」「全道や全国で悩みながら、しかし、誇りをもって仕事をしている人がこんなにいるという体験は極めて重要」と、こうした場に、職員が自主的に参加しあう職場風土にしてほしいとのべました。

第2児童相談所を作る計画、専門性構築への思い切った対策が必要

また、第2児童相談所を作る計画だが、「専門性の構築へ、思い切った対策を行うべき」とのべ、昨年の質疑で、児童相談所に勤務する児童福祉司の平均年齢が30.8歳、経験年数はわずか1.59年であることが明らかになったとして、「もともと経験年数の浅い職員が多い職場にあって、新人職員がたくさん配置されていくということになると現場は大変厳しい状況になる」とのべ、思い切った人事政策をすべきだと求めました。

最後に、「児童相談所の第3者評価の導入は検討されないので」と聞くと、高橋所長は、評価する機関が北海道にはない状況だが、「将来的には導入したい」とのべました。